
Miss Moonlight

三月やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i s s M o o n l i g h t

【Nコード】

N 0 6 1 5 B

【作者名】

三月やよい

【あらすじ】

吸血鬼から逃げる少女・実希に追うバンパイア・純一。一晚逃げ切れたら実希はゲームに勝てる。果たして彼女は無事夜明けを迎えられるのか？

（前書き）

初めて書いたので非常に稚拙です。

これからもっと精進しますので暖かい目で読んで下さい（照

はあはあ・・・実希は荒い息を手のひらで隠し目に入った階段下の隙間に身を隠した。

この屋敷はどのくらいの広さだろうか？

逃げ出して来た部屋からこの階段まででゆうに10の部屋はあったと思われる。

薄暗い廊下には所々に蝋燭の灯りだけがとり非常に頼りなかった。息が・・・戻らない・・・

必死に走ったため肺はしきり酸素を要求している。

その気配で「彼」に見付かってしまうのが彼女がもっともおそれていることだ。

もつとも、嗅覚も聴覚も人間の数十倍であるヴァンパイアからこれくらいで隠れられるとは思わないが。

逃げなくちゃ・・・生存本能がこの状況からの回避を叫んでいた。

上の階に上がるか？それとも階下へ？

そもそもここは何階なのか？

この屋敷は何階まであるのか？

初めて連れて来られた・・・しかも目覚めた時にはもう部屋のベッドの上だったのでこの屋敷の構造を実希が知る由もなかった。

毛足の長いカーペットが敷き詰めてあるので冷たさは感じないが、足音を少しでも小さくするため裸足で逃げ回るとはなんとも心細いものだ。

細い肩のほとんどを露出させるキャミソールタイプの美しいドレスは実希の魅力を最大限に引き立てるのには十分だったが逃亡にはひどく向かない装いだ。

ぎゅ・・・

実希はしっかりと膝を抱きこの心細い状況に耐えようと力を込めた。

「君にはこの色が一番似合うよ」

そう言って彼は目覚めた実希にサーモンピンクのドレスを着せた。シルク地で品の良い光沢が明るさを抑えた部屋の中でゆらゆらと優しい光をまとわせた。

アンティークの鏡台に写った姿は何だか自分であって自分ではないようだった。

アーモンド型の瞳は怯えているのか当惑しているのか掴み切れない表情でこちらを見ている・・・ローズピンクのグロスに彩られたふっくらした唇は何か言おうとしているが言葉が出てこなかった。

鏡越しに彼を見た。

いつ見ても一部のスキもなく優美な彼の姿。

仕立ての良いシャツはパリっとした印象を与えている。

実希のセミロングに揃えてある髪に真珠のついた飾り櫛を優しくさしてくれた彼の長い指はそのまま着せたばかりのドレスの肩紐を滑らせ・・・身を固くする実希を気にするでもなくそっと首筋にキスをした。

「似合うよ。すごくキレイだよ。」

柔らかい響きの声を実希は好きだと感じていた。

その唇が何度実希に口付けし何度その牙がこの肌に食い込んだかもう数え切れない。

彼の冷たい唇の・・・ちくんと刺さる牙の感触はリアルに首筋に思いつくことが出来た。

彼の優しいブラウンの瞳。

決して嫌いではないが今は逃げなくては！

「喉乾いたかな？お茶を持ってくるよ」

耳元で囁き頬に軽くキスをし、彼は部屋をにした。

今だ！

実希は彼の足音が遠ざかったのを確認し履いていたピンヒールを脱ぎそっとドアを開けてそこから逃げ出した。

どこへ逃げればいい？

取り敢えずは彼の行った方向とは逆へ。

次は？

・・・わからない・・・。

でもどこか、ここ以外へ。

さつき血を吸われなくてよかった。

膝を抱え頭を埋め考えをめぐらせた。

もしも吸血されていたら今こうして逃げている間に倒れてしまっていたかもしれない。

吸血行為自体に痛みはほとんどないがその後の貧血はどうしようもない。

それにしても・・・今まで朝がこんなにも待ち遠しい事が今まであっただろうか？

逃げきらなくては・・・朝まで・・・そうすればここから無事出ることが出来る。

そのタイムリミットを示す朝日はまだまだ・・・
ようやく空が白みかけ始めたくらいだった。

（捕まるわけにはいかないわ・・・）

心の中でつぶやき辺りの気配を伺った。

どうやら彼は近くにはいないようだ。

今のウチにここから離れなきゃ・・・陰になっているとは言え、廊下に面している階段下が安全な場所とは少なくとも思えない。

これだけ部屋数があるのだったらどこかの部屋で身を潜めた方が得策なのかもしれない。

彼の嗅覚をもってくれば実希がどの部屋に入ったかなどすぐに判明してしまうということに気付かなかった彼女はそれが最良と思い行動を起こすことにした。

もう一度辺りを注意深く見渡し実希はゆっくり立ち上がり・・・自分がたてた微かな布擦れの音にもおびえながら一番近くにある部屋のドアをそっと押した。

そつと押しただけではドアは全く動かなかったのでぐつと先ほどより力をこめてみた。

しかしどうやら鍵がかかっているらしい……もしかしして全部の部屋が施錠されているのかしら？

実希は途端に不安になりその隣の部屋に向かい同じようにドアノブに手をかけた。

良かった……こっちは大丈夫みたい……

ドアを開けるとその部屋は甘い花の香りがした……この香りは……バラだろうか？

先ほど実希が目覚めた部屋と同じく明るさを抑えた照明が上品な印象だ。

しかしいくら心地よさげでものんびりくつろぐワケにもいかない。部屋を見渡すとベッドサイドに香りの元となっている大輪のバラが束になって生けられてる。

ワイルドローズなのか香りのために品種改良した種なのか、通常のバラよりも香りが強くその色は実希のドレスと同じサーモンピンクだった。

「きれい……」

感動していられる余裕がないのは十分承知の上だが見事なその姿に実希はうっとりと目を細めた。

しかしすぐにどこか身を安全に隠せる場所はないかと……

中央に配置されたベッド、取っ手の細工が美しいクロゼットそしてアルヌーボー式のランプシェードを乗せたサイドボードに目を走らせた。

極力音をたてないようにそつとクロゼットの取っ手を引くときいと低いきしみ音とともに扉が開いた。

そんな音でも今の実希には飛び上がりそうになるほど驚かされた。どきどきと自分の鼓動が耳で聞こえると錯覚しながら中を覗くと中にはぎっしりと色とりどり女物のドレスやアクセサリー類が収納されていると思しき宝石箱が陣取っておりもしこの中に入るとしたら

中のものをどこかに出さなくてはいけなくなる。

実希は中に隠れることを諦めくると踵をかえすと

「この部屋は気に入ったかい？お嬢さん」

全く気配がなかった・・・しかしそこには確かに「彼」が・・・

純一が部屋入り口で悠然と立っていた。

「なかなか楽しい鬼ごっこだったよ。」

でもどうやらタイムリミットまで逃げ切るのは無理だったみたいだね」

やや女性的で整った目鼻立ちに柔らかそうな栗色の髪は同じ色の瞳とあいまって優しい雰囲気を出していた。

そんな姿から純一が人の生き血をすする吸血鬼とはにわか信じがたい・・・しかし吸血鬼一族や夢魔一族、そしてセイレーン一族といった人を食餌をする種族は人を釣る「餌」となるように魅力的な外見をしていることが多いと以前、教えてくれたのは純一本人だった。シャツのカフスを外すその瘦躯はランプシェードの柔らかい光の中で優美なシルエットを描きその影は真っ直ぐと実希に向かって歩み寄ってくる。

「あ・・・」

声を失い後ずさるとベッドサイドにあった生花のひんやりとした感触が実希の指に伝わった。

純一は部屋に追い込んだ余裕からかゆったりとした歩調で実希に近づき

「さ、逃げるのは諦めてこっちにおいで。」

このバラは刺がないとはいえ小枝で傷が付いてしまうよ。

美しい肌に傷を付けてもいいのは・・・」

俺だけだよ。

と実希の腕を取ろうとした。

「！」

するりとその手から逃げドアに向かい駆けだしたが

「まだ諦めないその気力は流石だね。」

流石・・・俺が選んだだけあるよ」

満足げな純一は瞬時に実希を後ろから抱きかかえるように捕まえ、そのままがく実希をキングサイズのベッドに押し倒した。

「・・・やつ・・・」

必死に抵抗するが男の・・・吸血鬼の力にはとても敵わず易々と組み敷かれてしまった。

「ん・・・だ・・・め・・・」

「だめじゃないよ？」

途切れとぎれに漏れる実希の抵抗の言葉にあやすような答えをし、ひんやりとした唇を実希の細い首筋はわせた。

「だめっ」

首を振りながら拒絶し身をよじろうともがいたが腕をしっかりと取られてしまい思うように動かない。

純一はそんな態度を意に介するでもなく口で器用にドレスの肩ひもを下ろし唇をそのまま首筋から・・・胸元へと這わせる。

「ねえ？俺から・・・吸血鬼から本当に逃げられると思った？

甘いなあ・・・もしも本当に逃げたいのならまず匂いを・・・そして足音を

消さなくちゃ・・・

実希はどこにいても美味しそうな香りがするよ・・・

これは隠すの難しそうだなあ」

実に楽しそうに実希の豊かな胸元に顔を埋めた。

「んっ・・・」

くぐもった声を出す実希の反応を楽しむかのように純一はさらに続けようとしたら

「こら、純一！本気になるんじゃないの！・・・もお」

実希はごっつん！と純一の額へ見事な頭突きをかました。

「あたたたた！

ごめんごめん。つい・・・ね。でもいいじゃん。

時間内に捕まえたってことは俺が勝ったからね。さ、今度は何し

てもらおっかなー」

「・・・あんまり・・・すごいのはダメだよお・・・」

この前の賭の代償を思い出したのか実希は少し顔をあからめた。

「大体・・・メイド服で一日過ごすとか・・・変だもん・・・

しかもあんな短くて・・・」

この前のゲームは逃げたペットのコウモリ・ゲンゾウ君を探すというルールだったが、それも純一の圧勝だった。純一はゲンゾウ君好みの(?)メスコウモリを飼っている夢魔・ファニーの家に行き即ゲンゾウ君を見つけたした。

『じゃ、負けたんだし・・・これ着て一日ね。

もちろんお外にでちゃダメだよ。こんな姿俺以外の男になんて見せたくないもん』

やつと下着が隠れるくらいの長さしかなく胸元も大きく開いたメイド服は全く持って機能的ではなく少しでも動くところち露出してしまいそうで非常に落ち着かなかった。

そんな格好でお茶を入れたりパイを焼いたり・・・

思い出すだけで赤面してしまう一日だった。

「いいじゃん。アレ。

俺結構好きだなあ・・・あ、今度はバニーガールとかにでもなってもらおうかな？」

「えー・・・もお・・・」

今回のルールは時間内夜明けまでに捕まらずに逃げ切れたら実希の勝ち、捕まえられたら純一の勝ちだった。

勝った方は一つ何でも言うことを聞かなくてはならない。

「でもね・・・今回の・・・実習兼ねたゲームってホント役に立つのお？」

だいたいヴァンパイアが日光に弱いっていうのも物語の中だけって教えてくれたの純一じゃない。

なのになーんでタイムリミットが夜明けまでなのお？」

映画じゃあるまいっと実希は負けたのが不満なのか、組み敷かれた

ままの状況が不満なのか軽くにらみながら純一に不満を述べた。

「まあまあ、やっぱり雰囲気だすために、ね。」

これも大事な実習のウチ。

それに俺のが先輩ヴァンパイアなんだから・・・先生の言うことはちゃんと聞くの」

「誰が私をヴァンパイアにしたのよ・・・もお・・・」

ホントこれが『上手な血のもらい方』訓練かなあ？

しかも何でわざわざこんなバラやお部屋まで用意して・・・ね、セ
ンセ」

部屋に立ちこめる甘いバラの香気を吸い込み、茶化しながら純一の
頬をつついた。

「いいの、折角吸血鬼一族族長直々に貸してくれた屋敷だよお？

俺の先生曰く、

『ヴァンパイアたるものシチュエーションにこだわって行為に及
べ』ってね。

吸血鬼は生まれながらにハンター気質だから逃げられると追いた
くなるし

抵抗されるとよりたかぶるんだよね・・・

ま、ヴァンパイアはロマンティストな種族なの」

「それってロマンチストなのかなあ？」

「ほら、シチュエーションに凝ってって辺りは・・・」

「・・・そっか・・・」

そうだよ、

そう言ってゆっくり顔を近付け、腕の中で潤んだ瞳を純一に向ける
実希に長い長いキスをした。実希も今度は抵抗はせずキスを受け入
れ純一の首に腕を絡める。

空によりやく朝の陽光が溢れ始めカーテンの隙間からその清らかな
光の筋を走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0615b/>

Miss Moonlight

2010年10月28日00時48分発行